
バカと闇の白夜叉と

守護神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと闇の白夜叉と

【Nコード】

N6086W

【作者名】

守護神

【あらすじ】

バカとテストと召喚獣の二次作です

設定は主人公は最強 秀吉は女 雄二は素直です。

プロローグ（前書き）

はじめまして守護神です。初投稿になりますので、更新めっちゃ遅い
ですし誤字脱字も多々ありますし文才もまったくありませんのでそ
れでもおkだとゆう方はどうぞ、カップリングは明久×姫路×美波、
雄二×翔子、康太×愛子、オリ主×秀吉×優子、でいきたいです。
オリ主は最強で雄二は翔子に対する思いが原作とちよつと違います。

あとオリキャラも少しだけだそうかなとおもってます。

主人公の名前は山神友貴やまがみともきは過去に暗い思い出があり人間関係に一線
引くよう接していた、そのため友人は多いのだが、「親友」と呼べ
る友達は一人もいなかった、そんな友貴にFクラスのメンバー明久、
雄二、Aツリーニ康太、秀吉、美波、瑞樹、Aクラスの人も混ざりはちゃめ
ちやな学園ライフがはじまります。

プロローグ

薄暗い戦場、白い装飾を身にまとい当たり一面の敵の死体を見下ろして血の付いた日本刀を持ち立ちつくしている、敵の数は100人以上の暴力団組員、その敵をたつた小1時間で全滅させたのだ。

その姿からこう呼ばれた「白夜叉」、
こうして彼に潰されていく暴力団は数知れず、闇の世界の白夜叉と呼ばれ続けている。

だが、彼は何のために、誰のために、戦っているのかは、誰も知らない。

しかし、彼の目はひどく青く澄んでいて何のためらいもなく人を切り倒していく姿は夜叉そのものだった。

彼の名前は山神やまがみ 友貴ともき

闇世界の狩人 白夜叉と呼ばれている。

ブログ（後書き）

すみません。

本当にごめんなさい。

だらだらになってしまった。

キャラ設定(前書き)

どうも守護神です。
今回はキャラ設定

キャラ設定

やまがみ
山神 友貴

身長は雄二と同じくらい

体格は細身だが筋肉で引き締まっている、髪は銀色で明久と同じくらいで容姿はいつもニコニコ笑っている顔をしているがキレたりすると鋭い目つきになる。

特技

剣術 示現流免許皆伝 天然理心流免許皆伝 宝蔵院流槍術免許皆伝

武術 ムエタイ カポエラ 空手 柔道 中国拳法 忍術

料理 プロ並み

好きな事

寝ること お菓子づくり

嫌いな事

孤独感 卑怯なやつ 仲間の事をバカにするやつ

長い戦いに巻き込まれ、「人間」としての感情が薄い、それゆえ愛情とゆうものを知らない。

異性にめっばう弱く接し方を知らない。

両親は幼い頃に他界し今は一人暮らし。

日本政府からの特命で闇世界の殲滅を命じられている。

そのため、帯刀を特別に許可されているが通常時は持っていない。

愛刀は斬鉄剣正宗

文月学園には一年次からいるが振り分け試験の日に暴力団の闘争に巻き込まれ欠席のためFクラス。

特殊な能力を持っており体が炎である。

闇世界の通り名は「白夜叉」

中学の通り名は「破壊神」

成績は単教科800〜1000点は取れる。

総合教科は8000点以上とれる。

召喚獣は新撰組の袴に武器は十文字槍に日本刀

腕輪はの能力は「火炎」武器などに火をつけられる。

点数消費は30点で一回点火

吉井 明久

基本的に原作通り

しかしげんかに強く中学の時の通り名は「雷神」

得意武術は空手

坂本 雄二

基本的に原作通り

通り名は「悪鬼羅列」

得意武術はボクシング

土屋 康太

基本的に原作通り

げんかに強く中学の通り名は「弧黒の忍者」(じゅうくうのにんじゃ)

得意武術は忍術

木下 秀吉

基本的に原作どおりだがほんとは女

げんかに強く中学の通り名は「疾風の剣客」

得意武術は剣術

流派は小野派一刀流

実は女

木下 優子

基本的に原作通り

剣術に長けていて流派は小野派一刀流
秀吉を女と知っていて隠している。

島田 美波

基本的に原作通り

姫路 瑞樹

基本的に原作通り

キャラ設定（後書き）

どうも作者と

友「友貴です」

友「強すぎだろ」

そうだね

でも書きたかったんだもん

友「俺しらないよ」

いいもん、がんばるから

次はいよいよ本編へ

第1話出会い（前書き）

今回は主要キャラをだしたいです

第1話出会い

友責サイド

いつもの通学が桜色に変わるこの季節いつも通りの時間に歩いているとチンピラに絡まれている2組に会った。

それは、疾風の剣客事木下秀吉と木下優子しゅうこのけんかくだった。

お互いちゃんとした形での話はしたことがないものの一度だけ手合わせたことがある。

その時の勝負は引き分けで終わったが2対1で2人とも小野派一流の免許皆伝相手に引き分けるのが精一杯だった。

いつもの2人なら、チンピラ相手などぶっ飛ばしてこの場を終わらせているだが、今日は状況が違った。

今日は二人とも刀となるものがなく、相手の手の中にはサバイバルナイフが握られていた。

ちと、やばいかな。

「なあ少しツラ貸せよ嬢ちゃん達よ」

「この前はうちのもんが随分とお世話になったからよお礼がしたくてなヒヒヒっ」

「抵抗するなら力尽くで連れて行くけどな」

「この前はそつちから喧嘩を吹っかけてきたんじゃない、わたし達に非はないわ」

「そつじゃ！、そつちが悪いのじゃ それとワシは男じゃ」

いや、おまえは女だから！！

なんてつつこみ入れている暇は無いんだった

早く助けに行かないと

「おい、お前らその辺にしとけよ 女の子2人によってたかつて情けないぞ。」

「お、お主は・・・」

「な、何よ・あんたまた一戦交えようってゆうの？」

「まさか？ 困ってそうだから助けに来たんだよ」

「なんだおめえは！！ ブツ殺されてえのか」

「それはこっちのセリフだ」

まず一撃 グラサン掛けた奴の後頭部に右ハイキックを食らわせて
右に居たサバイバルナイフを持ったやつにそのまま延髄蹴りを食ら
わせ沈めて最後の一人は左ミドルキックで沈めた。

「ふう、まあ気絶しない程度にやったから自力で帰れよ、あとナイ
フは没収な」

そう言い放ち、自分の鞆を拾い啞然としている2人に対して

「おい、なにしてんだ 遅刻すんぞ」

「あ、そうじゃな 姉上ゆくぞ」

「うん／＼」

なんでか知らんが姉の方は顔を赤らめていた。

第2話特別観察処分者（前書き）

今回は友貴の召喚獣について書きたいです。

第2話特別観察処分者

ときときside

そんな朝のいざこざがありなんとか学校までたどり着いた。

校門の前には色黒のスポーツマン体型の補習の鬼こと西村先生が立っていた。

友、優、秀「おはようございます」「」

「おはよう、木下姉弟、・・・山上」「」

なぜに僕の顔みて残念な顔するんでしようかね？

西村先生「これが振り分け試験の結果だ」

「「ありがとうございます。」「」

西村先生「山上・・・お前もつくづく運がないとゆうかなんとうかな・・・」

友貴「まあしょうがないですよね」

西村先生「まあ運も実力のうちって、元気出せ そのうち良いこともあるさ・・・ それとこのあと学園長室に行くように」

友貴「へ？なんでですか？」

西村先生「ふふつまあ行つてからの楽しみだ」
なんだそれ？

まあいいや、とりあえず行ってみよう

「（コンコン）失礼します。」「」

「来たねジャリガキ、入りな」

そこにいたのはここ最高権力者藤堂カヲル学園長が座っていた。

「なんのようですか、ばあさま」

「学校でその名前だよぶんじゃないよ」

それと同時に僕の育ての親でもある。

「ちよつとあなたの召喚獣についての説明さ、口で説明するのも面倒だね、召喚してみな」

「はい、試獣召喚サモン」

ポンツ 僕の召喚獣登場

「なにか変わった事はあるかい？」

「いえ別に変わった事はないですが・・・」

「そうかい、それなら一回召喚獣を消すよ」

フィールドを消し、僕の召喚獣も消えた

そうして学園長はノートパソコンを打ち込みこちらにむき直した。

「今度は召喚フィールドを出すだけあんたは召喚獣になっちまうよ
うになってるからその気でいな」

「??？わかりました」

なにいつてんだか

僕自身は召喚獣になれないでしょうに

「それじゃいくよう」

そういつて召喚フィールドを出された瞬間・・・！

ポンツ 召喚獣になった僕登場

『なにこれえれれれれえええええ』

「ふう・・・なんとか成功さね」

『・・・詳しく説明してください』

声高いな、目線もだいぶ低いし

「説明するも何もそのまんまさね、あんたの意識を召喚獣に移した
だけだよ」

『・・・』

「それに伴いあんたを特別観察処分者にするからね」

『なしてー！ー！ー！ー！』

「ほら用件は済んだからはやく教室にいきな」

『いや、自分この姿のままなんだけど・・・』

「召喚フィールドからでたら元の姿に戻るよ」

なんでもこの姿では五感も存在し物にもさわられるらしい、

自分だけルールが少し変わるそうで、なんでも戦闘時自分が召喚フ
ィールドにいる間、相手が自分を指定していなければフィールドを

離れても敵前逃亡にならないとか。召喚フィールドがある限り、自分が元の身体に戻れないためらしいです。

もちろん勝負を申しこまれている場合は戦闘に参加しなくてはいけないそうです。

「最後になるが、召喚フィールドが張られていれば問答無用でア
ンタは召喚獣に成る。」

せいぜい何かの拍子に召喚獣にならないように気をつけな」

まったくどうなるんだか……

ちなみに「黒金の腕輪」なる物をもらった。

まあこれはみんな知ってるよね。

そんなことがありFクラスの前に来るとひどいもんだった
腐った貴、

傾いた黒板

男ばかりのむさい教室

廃墟 とゆう言葉が頭の中を駆けめぐる

まあいい住めば都だ

なんとかなるだろ。

そう思いクラスのドアを開けた。

第2話特別観察処分者（後書き）

うーん

うまくまとめきれなかった

次回はうまくまとめたいです。

第3話 Fクラス（前書き）

今回はFクラスに合流します。

第3話 Fクラス

ガラッ

雄「早く座れウジ虫野郎」

友「・・・何やってんの雄二」

ドアを開けると赤いたてがみの野性味あふれる悪友の顔があった。

雄「ああ 友貴か 先生が遅れているらしいから教卓に上がって見た」

友「そうか」

いろいろと聞いてみたい事もあったが幾分自分は口があまりうまくないため黙って席に着くことにした。

するとすぐに学園を代表するバカがやってきた。

アキ「すみません遅れちゃいました」

雄「さつさと座れウジ虫野郎」

アキ「・・・なにやってんのさ、雄二」

雄「クラス代表だからな、俺の兵士たちをみていた」

福「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

不意に背後から覇気のない声が聞こえてきた。

そこには寝ぐせのついた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにも冴えない風体のオジサンが居た。

福「それと席に着いてもらえますか？HRを始めますので」

福「皆さん、席について下さい。今日からFクラスの担任をさせていただきます。これから一年間よろしくお願ひします。必要なものがあれば極力自分で調達して下さい」

あの・・・ここ学校ですよね？

「それでは、廊下側の人から自己紹介をして下さい」

先生の言葉を皮切りに、生徒たちの自己紹介が始まった。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

「……土屋 康太」

あれは康太か、相変わらずの無口だな、まあ人の事言えないけど。

「島田美波です。海外育ちで日本語の会話は出来るけど読み書きが苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は……」

へえ、なかなかアクティブそうな少女だな。

「…吉井明久を殴ることです」

前言撤回、恐怖です。

明久に手を振っているけど明久は震えているな。

次はアキか

「コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』」

って呼んでくださいね」

『『『『『ダアアーリーン!!』』』』』』

「失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願い致します」

まさに自業自得だな

次は自分だな

「山上 友貴です。趣味は武術と料理です。よろしく」

うん、我ながらうまくできた。

最後は雄二だね

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『『『『『えっ?』』』』』』

教室全体から驚いたような声が上がりました。

「丁度良かったです。今、自己紹介をしているところなので姫路さんもお願ひします」

「は、はい! あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願ひします……」

「はいっ！ 質問です」

「あ、は、はい。 何ですか？」

「何でここにいらっしゃるんですか？」

あるF男子生徒がみんなの疑問を代表して言いました。

「そ、その………振り分け試験の最中、高熱をだしてしまいまして………」

F『そう言えば俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

F『ああ、科学だろ？ あれは難しかったな』

F『弟が事故にあって全力が出し切れなくて』

F『黙れ一人っ子』

F『前の晩彼女が寝かせてくれなくて』

F『今年一番の大ウソをありがとう』

姫路さんの欠席理由を聞いて、クラスメイトが訳のわからない言い訳をし始める。

姫「で、ではっ、一年間よろしくお願ひしますっ！」

席につくや否や、安堵のため息を吐いて卓袱台に突っ伏す姫路

「き、緊張しましたあ………」

「あの…吉井君…」

「姫路、明久がブサイクでスマン」

雄二の明久いじりが始まった。

「それでもないですよ！ブサイクどころかその…むしろ」

「まあそついえば見てくれは悪くないよう見えるかもしれない。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気がするし」

「え、誰？」

「確か久保…」

「え、どの久保さんだろ？」

「…利光だったかな」

久保利光 Aクラス

「……………」

「明久。声を殺してさめざめと泣くな」

「半分は冗談だ。安心しろ」

「ねえ？残りの半分は？」

「はいはい、その人たち、静かにして下さいね……」

バキィ！

「替えを用意してくるのでしばらく待って下さい」

先生はどこかへ行ってしまった。

「雄二、友君ちよつといい？」

そう言っつて自分たちを廊下に連れ出す明久

友「で、何なんだ話っつて？」

雄「まさか試験召喚戦争をやるっつて言っつんじゃ無いだらうっな？」

アキ「…いや、その通りだよ」

友「そうだと思った」

アキ「何で分かったの？」

友「なんとなくかな？」

雄「なんでおまえがいきなり試験召喚戦争なんてやるっつとおもったんだ？」

「嘘をつくな。全く勉強に興味のないお前が、今更勉強用の設備

なんかの為に戦争を起こすなんて、そんなことはありえないだろう
が」

「そ、そんなことないよ。興味がなければこんな学校にくるわけ
が」

「お前がこの学校を選んだのは、試験校だからこそその学費の安
さが理由だろ？」

そうなんだ アキはすぐに金使い込んだじゃうから

雄「姫路のためか」

アキ「ちちちちちがううよ」

雄「まあいい俺もやるうとおもってたんだ いっちょやってやるう
ぜ」

こうして自分たちの戦争がはじまった。

第四話試験召喚戦争（前書き）

今回は短めです

第四話試験召喚戦争

先生が戻ってきて自己紹介が再会されて最後の雄二の番になった。福「では最後はクラス代表の坂本雄二君、お願いします。」

雄「うっす 了解」

雄二は教壇に上がりゆっくりとみんなを見渡して

雄「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

こっからが雄二の見せ所だな。どうやってFクラスの皆を乗せるかな？

「さて、皆に一つ聞きたいことがある」

雄二が全員の生徒を見るように告げる。

間のとりかたがうまく、全員の視線はすぐに雄二に向けられるようになった。

皆が雄二を見た後、雄二は教室の各所に目を向けた。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

つられて皆雄二の視線を追い、それらの備品をみてしまう。

第四話試験召喚戦争（後書き）

今回は短いです

感想お待ちしております。

第五話 Fクラスの戦力確認（前書き）

今回はFクラスの戦力確認です。

第五話 Fクラスの戦力

突然の雄二の宣言にクラス中がざわめきだす。

F『勝てるわけがない』

F『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

F『姫路さんがいたらなにももらない』

雄「そんなことは無い。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる。」

しかし、そんな中で雄二は自信満々に宣言してみせた。

F『何を馬鹿なことを』

F『できるわけがないだろう』

F『何の根拠があつてそんなことを』

F『姫路さん結婚してください』

普通はそう思うよね 最後はよくわからんけど

雄「根拠ならあるさ。このクラスには試召戦争で勝つことの出来る要素がそろっている」

この雄二の言葉をうけてFクラスの皆が騒ぎ始める。

雄「それを今から説明してやる」

得意の不適な笑みで説明を始める。

雄「おい、ムッツリー二に。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

ム「・・・・・・・・・・・・・・・・！！」（ブンブン）

姫「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズをとる康太。
姫路はスカート裾を押さえ、遠ざかると、康太は顔に付いた畳の
あとを隠しながら壇上へ歩き出した。

雄「土屋康太。こいつがあ有名な寡黙なる性識者 ムツツリーニ
」
「……………！！（ブンブン）」

ムツツリーニ。この名前は男子には畏怖と畏敬を、女子には軽蔑を
もって挙げられる。

F『ムツツリーニだと……………？』

F『馬鹿な、奴がそうだといいのか……………？』

F『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとし
ているぞ……………』

F『ああ。ムツツリに恥じない姿だ……………』
もう隠したって無駄なのになあー

雄「姫路のことは説明する必要はないだろう。皆だってその力はよ
く知っているはずだ」

姫「えっ？わ、わたしですかっ？」

雄「ああ、うちの主戦力だ。期待している」
ん？なんかドアの外に気配を感じるな……………

F『そうだ。俺達には姫路さんがいるんだった』

F『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

F『ああ、彼女さえいれば何もいらぬ』

誰だ？さっきから姫路にラブコールしてる奴は？

雄「木下秀吉だっている」

木下秀吉。学力ではあまり名をきかないが、他の事だったら有名だ。演劇部のボーブだったりだとか、双子の姉がいたり。

F「おお．．．．．！」

F「ああ。あいつ確か木下優子の．．．．．」

F「当然俺も全力を尽くす」

F「確かになんだかやってくれそうな奴だ」

F「坂本つて、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？」

F「それじゃあ、振り分け試験のときは姫路さんと同じで体調不良だったのか」

F「実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな！」

やっぱり僕の存在は知れ渡ってなかったようだな。

まあその方がいろいろやりやすいからいいけ．．．

雄「いや、Aクラスレベルの奴はもう一人いる 友貴たってくれ」

なんだ結局ばらすのか

友「ん 了解」

雄「こいつはAクラス学年主席をとれるほどだ」

F「いや、聞いたことがないな．．．」

そんなささやきが所々か聞こえてきた

そりゃそうだ 1年のときはあんまり学校来てなかったからな

雄「そうか．．．じゃあこういえばわかるか．．．．．」
「破壊神」
と．．．

F「『！』『！』『！』『！』『！』」

クラス全体に緊張が走る

F「あ．あの破壊神なのか．．．」

F「喧嘩の時は本気の時、それ以外は素手でやるあの．．．」

F「文月四天王の中で一番強いとか」

うーん まあ言われていることは間違っていないからな

友「あ！そう言えばみんなには言っていなかったけど僕は（特別観察処分者）です」

一同「は？」

F「……それってバカの代名詞じゃなかったっけ？」

友「いや ちょっと僕のは違うんだよね 福原先生、召喚許可をおねがいします」

福「ハイ 承認します」

フィールドが開かれた瞬間

ポンッ 友貴が召喚獣になった音

男子一同「なあああにいいいいいいー」

姫路 美波 秀吉「か・かわいい」

雄「おまえ 何ともないのか」

友「ああ 基本的には明久と同じだ しかしフィールドバックが通常より大きいんだ」

F「こ・こんなすごいやつらがいるんだもしかしたら俺たちできるんじゃないか」

F「おいおい、俺達ならやれるんじゃないか！？」

F「なんだかやれそうなきがしてきたな！」

こんなにすごいメンバーが揃っていれば打倒Aクラスも夢じゃなくなってきた。

今クラスの士気は確実に上がっていた。

雄「それに、吉井明久だっている」

………シーン

あーあ また明久で締めるのか

アキ「ちよつと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！まった

くそんな必要はないよね！」

F「誰だよ、吉井明久って」

F「聞いたことあるか？」

F「さあ？初めて聞いたが。このクラスにいるのか？」

アキ「ホラ！折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！僕は雄二たちとは違って普通の人間なんだから、普通の扱いを

って、なんで僕を睨むのさ雄二！」

雄「そうか。皆はこいつのことを知らないのか」

「ならば教えてやる。」

「こいつの肩書きは《観察処分者》だ！！」

F「……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」

アキ「ち、違うよっ！ちよっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

雄「そうだ。バカの代名詞だ」

アキ「肯定するな、バカ雄二！」

あーあ アキかわいそう

アキ「わーん 雄二がいじめるよ」

友「よしよし明久 兄ちゃんが仇とってやるからな」（キッ）

雄「（ビクッ）とにかくだ。俺達の力の証明として、まずDクラスを征服してみようと思う」

雄「皆、この待遇は大いに不満だろう？」

「当然だ！！」

雄「ならば、総員武器 ペン をとれ！出陣の準備だ！」

「おおーっ！！！！」

雄「俺らに必要なのは卓袱台ではない！俺らに必要なのは……」

「Aクラスのシステムデスクだ！！」

雄二 後で覚悟しとけよ……

第五話 Fクラスの戦力（後書き）

どうでしたか？

相変わらずの駄目文ですね

もっとうまく書けるようにがんばります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6086w/>

バカと闇の白夜叉と

2011年11月17日08時14分発行